

Title	チヨースァーとポイーシァス
Author	吉田, 新吾
Citation	人文研究. 9 卷 6 号, p.611-624.
Issue Date	1958
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

チヨースーとボイーシアス

吉田新吾

I

チヨースーは、詩人の生命を『薔薇物語』によって鼓吹されたように、思想の基盤をボイーシアス(Boethius)の『哲学の慰め』(De Consolatione Philosophiae)によって提供された。ところで、『薔薇物語』の中世文学における位置を、中世哲学に対して占めるものが、『哲学の慰め』である、といつてもいいすぎではないであろう。それらは、それぞれ詩と教養の聖典とされたからである。ボイーシアスは、独創の思想家よりはむしろ古典の祖述者、テイラーのいう「古代思想と初期教父思想の伝達者」の一人であつたが、しかし、ランドのいわゆる「中世建設者」の一人であり、中世最大の教師であつた。すなわち、まず、啓蒙的な訳著をもつて、七芸のうち論理、算術、幾何、音楽の教科書の權威を独占し、さらに、はるかに重大なことに、『哲学の慰め』をもつて、中世思想の源流となり、中世に深遠な影響を与えたのである。『哲学の慰め』の現存する写本が四百になんなんとする事実は、それが中世において紳士必備の書であつたことの有力な証拠であり、それは、ダンテ、ボッカチオに影響し、ジャン・ド・マンに伝訳され、アルフレッド大王、⁽³⁾チヨースー、⁽⁴⁾エリザベス女王、⁽⁵⁾I・T・⁽⁶⁾等々によって十八種に英訳されており、パッチの示すとおり、その翻譯、改作、模作は、おびただしいのである。ボイーシアスは、ギボンの有名な言葉に従つて、「カトーやキケローが同国人として認めることのできたであろうローマ人の最後の人」⁽⁸⁾として、古代哲学の掉尾を飾り、同時に、異教哲学をキリスト教と調和する努力に道をひらいて、中世スコラ哲学の先驅となつたのである。

チヨースーは、『哲学の慰め』から深遠な影響を蒙った。全訳し、数多くの作品のおよそ一四三カ所にヴァーバル・エコーを示す。『哲学の慰め』に含まれるほとんどすべての問題を自らの問題とし、そしてもっとも重要なことに、世界が神の摂理のもとに厳然たる秩序を保つというポイーシアスの世界観を、わがものにする。チヨースーのたぐい稀な人間寛容の根底にあるものは、このような、秩序と安定の中世的世界観である。チヨースーにおけるポイーシアスのそのような影響を、『哲学の慰め』の思想に即しながら、究明することが、以下の課題である。⁽⁹⁾

II

第一に、運命 (Fortune) のミュータビリティ、現世の無常ということが、ポイーシアスによって、『哲学の慰め』の第二巻の最初から pr. 4 までに強調せられ、チヨースーによって鋭敏に感じとられる。

変りやすいことが、運命の本性であり、それなくしては、運命が運命でなくなる。運命のめぐる小車が、人間を翻弄する。「これが、私 (運命の女神) の力であり、この戯れが、私の永遠の戯れである。すなわち、私は、回転する車をぐるぐる廻して、一番下のものを一番上へ、一番上のものを一番下へひっくりかえすことを喜ぶ」⁽¹⁰⁾これが、中世文学にコンヴェンショナルな運命の肖像の原型となった。そして、チヨースーで、『トロイルスとクリセイデ』において強調され、⁽¹¹⁾『運命』 (Fortune) の主題となる。

万有流転、生者必滅は、永劫の定めであり、禍福は、糾える繩のごとくである。「この世の姿が、かくも不安定で、かくも変転きわまりないのに、お前は、人間のはかない幸運に頼ろうとするのか。つかのまに移ろう善を信じようとするのか。生じたもので、確乎不動のものはないことは、永遠の法則の定めである」⁽¹²⁾「人間の幸福の甘さは、多くののがさをふりかけられている」⁽¹³⁾それが、チヨースーでは、「歓楽の果てに憂いあるは、世の常である」⁽¹⁴⁾となり、「悲しみあれば喜びあり、歓びあれば愁いあり」⁽¹⁵⁾となる。かつて味わいし幸福の思い出ばかり悲しきはなしという思想が、ポイーシアスに溯

源し、ダンテ、そしてチヨースーにエコーする。⁽¹⁶⁾

そして、悲劇とは、チヨースーにとって、「栄華をきわめたものが、高位より不幸の中に顛落し、悲惨な末路に終る、ある物語の謂いである」⁽¹⁷⁾が、さらにポイーシアスの「悲劇とは、運命の女神が思いもよらぬ打撃で、勢威赫々たる王国を顛覆さす行為を敷くことにほかならない」⁽¹⁸⁾に従って、「修道僧の物語」⁽¹⁹⁾にいうとおり、繁栄から悲惨へと陥れる運命の恣意と悪意を取扱うものなのである。

このような運命のvarietyややすさの感覚が、チヨースーで熱切な現世無常感となって現われる。「この世は、悲しみに満ちた往還にすぎず、われらは、ゆきかう巡礼である」⁽²⁰⁾。「この世は、美しい花のようにはかなくも移ろいゆく市にすぎない」⁽²¹⁾。「実際、わたしが生まれたとき、すかさず死神が命の栓を引抜いて、流れ出させておいたので、それから絶えず栓から流れ出し、今では樽も空っぽ同然。命の流れが、今は輪縁にぽとぽと滴るばかり」⁽²²⁾。

ポイーシアスとチヨースーとは、運命のミュータビリテイの受取りかたに差異がある。ポイーシアスにとって、運命の無節操は、逃避さるべきでなく、毅然として堪え、敢然として戦わなければならないものである。ストイシズムが、ポイーシアスのものである。ところが、チヨースーは、やさしい魂のふるえる感動をもって、現世の無常に共感するのであり、ポイーシアスが、無常のゆえに現世的なものを軽蔑、否定するのに対して、チヨースーは、無常のゆえに現世を愛し、寛容する。その無常感をもって、自らをペインスの詩人、そしてジーニアル・チヨースーとして示すのであり、現世的なものを超絶して高いものあることをしかと見抜きながら、しかもなお、すぐれて現世的な詩人、ヒューマニストであることを示すのである。

次に、偽りの幸福を去って、真の幸福に就くべきこと、すなわち、パッションと煩惱を脱却して、リーズンと善に生く

べきことが、ポイーシアスによつて、それぞれ『哲学の慰め』の第二卷 Pr. 5 から m. 7 まで、第三卷 Pr. 2 から m. 8 までと、第三卷 Pr. 9 から n. 12 までとに續説され、その影響が、モラリスト、キリスト者としてのチヨースーの重要な一面となつて現われる。

人間は、本来、驕ろげながら、始源に帰ろうとする郷愁を自然的衝動としてもつものである。そして、神、すなわち最高善、真の幸福が、万有創造の始源であるとともに、万物の帰りゆかんとする古里、終局である。しかるに、人間は、とかく誤謬と迷妄に心眼を曇らされて、道を誤り、ひたすら偽りの幸福を追い求めている。人は、すべからず正道に立返り、真の幸福に就くべきである。そして、偽りの幸福とは、世俗的幸福、すなわち、富 (richesses)、高位 (dignities)、王威 (reignes)、名誉 (glorie)、快樂 (delices) などである。それらは、むら気な運命 (Fortune) の贈りものであつて、人格本然の具有物ではなく、本質的な善を自らの中に蔵しない。それに対して、真の幸福とは、*summum bonum*、すなわち、満足 (suffisance)、尊敬 (reverence)、勢力 (power)、名声 (高貴) (renoun, noblesse, gentillesse)、喜び (gladnesse, joie) の総合としての徳であり、神の中に存するもの、神性である。

さて、チヨースーの自らいわゆる「道徳と信仰の書」²³⁾は、『哲学の慰め』のチヨースー訳 Boece を初めとして、『尼院長の物語』、『第二の尼の物語』、『教区牧師の物語』などを含むことはいふまでもないのであるが、また、ポイーシアスの影響を受けて、上述の思想を主題とした、次のようなチヨースーの一連のバラードをさすのである。『眞実』(Truth) は、世俗の欲望を超越して、徳に生き、神を求めよと勧め、『高貴』(Gentillesse) は、高貴が門閥によるものでなく、人格の徳によるものであることを説き、²⁴⁾『恒心なし』(Lack of Steadfastness) は、澆季の世を恒心なしと歎じ、『昔』(The Former Age) は、そういう末世とことかわり、真の幸福のあつた太古黄金時代を讚美するものである。

『哲学の慰め』が、哲学として、ギリシャ倫理学とキリスト教との調和の美しさを啓示したように、『トロイルスとクリセイデ』の結末は、その深遠な影響のもとに、詩として、倫理的、宗教的な美しさを具現する。それは、「天上にある

完全な幸福」とくらべて、「この惨めな世界」で追求される「永続せぬ盲目の快樂」の蔑視さるべきこと、「現世の空しさから古里に帰り」、神を愛すべきこと、地上の移ろう愛でなくて、キリストの恒久不変の愛こそ求むべきことを、格調高く歌い上げているからである。そこでチョーサーは、ボイーシアスとまったく同じに、世俗的幸福を真の幸福のために棄却する。しかし、それは、トロイルスの悲劇の切なさにチョーサーが堰を切って注ぐ憐憫のゆえにほかならない。トロイルスを天上に救うが、それは、地上ではついに救いのなかつたトロイルスに残されていた唯一つの救いなのである。トロイルスの魂をして地上を軽蔑させるが、それは、あくまでも天上からするものである。そしてチョーサーは、ボイーシアスとは異なり、地上においては、神、最高善、真の幸福は超絶的に高いものであるが、同時に人間と世俗的幸福が尊いということ、心底から信じていた。それゆえ、『トロイルスとクリセイデ』の全篇を、結末の精神をもって終始一貫されたボイーシアス的な書、すなわち、偽りの幸福との対蹠をもって真の幸福を浮び上らせ、人間の愛を神の愛のために否定すべく書かれたものと見るのは、誤りといわねばならないのである。しかし、そのたぐい稀な現世愛着にもかかわらず、なおチョーサーが真理を見つめ、神を見ていたということは、大したことであった。チョーサーは、「道徳と信仰の書」で、自らをモラリスト、キリスト者としてはつきりと証拠立てるのであり、そしてそれが、普遍的にチョーサーの根底に深く潜在するといっても過言ではないであろう。

IV

次に、摂理 (Providence, Purviance) の公正を信じ、運命 (Destiny, Fate) の序列に従うということが、『哲学の慰め』第四巻の主題である。弁神論 (Theodicy) をもって、秩序の世界観が、確立されるのである。チョーサーでは、『騎士の物語』の結末に、それが、みごとに再現されるのであるが、もっとも重要なことに、それは、一般にチョーサーの世界観の基盤となっているのである。

もともと、ポイースアス(C・四八〇―五二四または五二五)は、ローマの名門に生まれて、頭栄をきわめたが、叛逆の冤罪に問われて投獄され、絞首の刑に処せられたのであって、『哲学の慰め』は刑死の前年に書かれた獄中記であり、したがって、無実の罪に呻吟する囹圄の人に当然なこととして、運命(Fortune)の不当を詰り、天道の矛盾を怨むことから始まるものである。すなわち、第一巻の主題は、善が滅び、悪が栄え、世は逆様であるという、運命の非道に対する痛憤であった。それが、今また第四巻で取上げられるのである。それに対する答えは、万物が善へ赴こうとする自らの法則によって規定されており、善人には必ず報酬が、悪人には必ず懲罰があるということ、公正な摂理のもとですべての運命はよいということである。なぜならば、神は、善の維持者、悪の排除者であり、善人は、善を獲得することによって、人間以上の神となり、真の幸福にあずかるが、悪人は、悪のゆえに、人間以下の畜生に墮して、不幸であるからである。善人にとっては、善そのものが報酬であり、悪人にとっては、悪そのものが懲罰である。悪人は、悪人としては存在するが、善を求めるという、存在する万物に共通の目的を棄てるという意味で、存在することをやめるのであり、悪は無に等しい。

この世は、摂理と運命(Destiny)に支配される秩序整然たる世界であり、そこでは偶然やでたらめは許されていない。摂理とは、万有支配の様式が、神の叡智の純粹性それ自身において考えられたものであり、運命とは、それが、神によって動かされ規定される事物との関連において考えられたものである。「神は、なすべき事柄を摂理によって単一的かつ不易に規定し、その規定した事柄を運命によって多様かつ時間的に施行する」²⁵。摂理の、個々物についての時間的、空間的施行者が、Destinyであり、そしてDestinyの手先として直接に人間を支配し、この世の一切をその直接の贈りものとして与えるものが、Fortune²⁶である。神は、摂理の高い望楼から見下しながら、厳正公平に運命の秩序を展開する。

このような秩序の思想を、『騎士の物語』の結末ほどよく反映しているものはないであろう。そこで論述されるものは、万物をつなぐ愛の絆、万物の始源かつ終局としての永遠、不動、完全な神、神の規定した事物の順序、そして万物の宿命という摂理の受容である。「天上の主動者たる神が、初めて愛の美しい絆を作りたもうたとき、その効果は偉大に、神慮

は高遠であつた。なぜか、またいかなる意味か、神は十分ご承知のことであつた。何となれば、その立派な愛の絆をもつて、神は、地水火風を逃げうせぬように、ある限界に縛りたもうたのであるから。その帝王、主動者こそ、この惨めな下界において、ここに生まれてくるすべてのものに一定の寿命を定めたもうたのであり、たとい短かくすることはできても、その寿命を越えることはできない。……そこで、人は、この秩序によつて、その主動者が永遠不動であることをよく悟ることができる。人がもし愚者でないならば、あらゆる部分は全体より出ずることがよくわかるであらう。なぜなら、自然は、物の部分から始まるのでなく、完全、不動のものから始まり、降つて、ついには腐敗するに至るからである。それゆゑ、神は、賢明な神慮からして、いと巧みに物の順序を定めたまい、事物と進行の種類は、順次に相続くものであつて、たしかに永遠のものではない。「かくなしたもうは、誰あろう、上帝ジューピター、森羅万象の帝王にして原因、實際万物をその由来する本来の源に戻したもう神。いかなる身分の生きとし生けるものも、これに逆らうは詮なきわざ。それゆゑ、思うに、必要を徳となし、避くべからざること、ことにわれわれすべてに当然定められていることを快く受け容れるのが、智慧というもの。いやしくも不平をかこつものは、愚かにも、万有を導きたもう神に叛逆するものである。」²⁷ とういう、摂理と運命の支配する秩序の世界、それが結局チヨースターの全世界なのである。

最後に、摂理と運命の必然ということ、そして予定説 (predestination) あるいは決定論 (determinism) と自由意志との調節が、『哲学の慰め』第五巻の主題であり、チヨースターに重大な影響を及ぼして、その運命の觀念を形成する。

神は、現在の単一性をもつて永遠的であり、世界は、瞬間的現在の運動をもつて持続的である。神の叡智は、単一的認識をもつて、時間的運動を超越し、過去と現在と未来の無限の領域にわたるものであり、人間の犠牲が時間的現在において見るものを、永遠的現在において見る。すなわち、時間的には未来に起こることの一切が、神の眼には、あたかも今起つ

ているかのように現在の見えるのである。一切は、摂理によって先見されるのであり、起ると予知されたものの一切は、必然的に生起するのである。このような摂理の必然は、すなわち運命 (Destiny) の必然ということである。摂理の規定したものを施行するのが、運命であるからである。そして神の摂理の必然、不可避という観点からすれば、運命は Destiny と呼ばれるのであり、より遠く神の単一性から離れているため、ミュータビリティを特色とするということに重点を置けば、Fortune と呼ばれるのである。

それでは、神の予定は、人間の自由意志といかに調節されるであろうか。一切の事柄の生起は、神の叡智からすれば、先見通りに必然的なのであるが、それらのうちのあるものは、それ自身の本性からすれば、まったく自由である。したがって、必然には単純必然と条件必然と二種あり、後者の場合に意志の自由が存在するわけである。しかし、自由意志より生ずるものも、神によって先見されるのであり、神の叡智から見れば、必然的である。以上のような、先見と自由意志の調節からして、『哲学の慰め』の結論が、次のように導き出され、哲学と宗教の調和が、成就されるのである。「意志の自由は、人間にとってそなわれずに残る。……神は、万有の観察者、先見者として天上にあり、その観察の現在の永遠性は、つねにわれわれの行為の多様性に応じて、善人に報酬を、悪人に苦惱を分配、規定する。神の中に置かれた希望と祈りが、無益で無駄になることはない。……それゆえ、悪徳に抗し、避け、徳を敬い、愛し、心を正しい希望に高め、謙虚な祈りを天に獻げよ。……勇氣と徳の大いなる必要が、お前たちに課せられ、命ぜられている。なぜなら、お前たちは、万有を認識、判決する裁き主の眼前で行動しているからである」⁽²⁸⁾

以上の思想の要点が、チヨースーにおいて、運命の必然という重要な観念となる。ところで、運命の観念としては、すでに古代英語時代に、ポイーシアスとは別種の、純粹に北歐的なものがあった。北歐的な運命 (Wyrd) とは、神々の黄昏の思想に従って、神々と人間の永劫の敵であり、人間生活の外を取巻く暗黒の世界の混沌と不条理という悪であり、善悪を区別せぬ苛酷さをもって、人間に不可避の破滅をもたらすものである。「望みなきかゆえに完全な、絶対の抵抗」⁽²⁹⁾を

もって、運命にあらがい、善を全うするへロイズム、不可避であるが承認されぬ敗北の逆説をもって、運命の与える破壊に屈服することを知らぬストイシズム、それが武勇の倫理であり、中世前期に支配的な原理であった。このような北歐的な運命は、神々と人間の敵としての宇宙的な悪である点で、ポイーシアスのいう運命と異なり、また、より超絶的で神秘的であり、より盲目的で宿命論的であるが、しかし、不可避の必然という点では一致している。すでにこのような北歐的な運命観をもったことのあるアングロサクソン人が、ポイーシアスの運命論に非常な興味を覚えたのは、当然のことであつた。アルフレッド大王やチョーサーが、『哲学の慰め』を翻訳するに至つたゆえん的一端は、まさしくそこにあるのである。

さて、『トロイルスとクリセイデ』は、すでにたびたび述べたとおり、チョーサーの作品のうちで、もっとも多く『哲学の慰め』の影響を蒙っているものである。今また、運命の必然ということが、単なるヴァーバル・エコーとしてでなく、全体としてのこの作品の制作にきわめて重大な意味をもつものとなっていることを指摘しなければならない。チョーサーは、クリセイデを宮廷的恋愛の理想のへロインに仕上げようとする熱望と、不実という最大の罪を犯した女性を描かねばならぬ義務との板挟みとなつたのであり、それがクリセイデの複雑微妙な性格を生んだゆえんである。そういう矛盾を最小限にいとめようとするチョーサーの最大の努力が、別離と背反の責任を、クリセイデの性格よりは、はるかに多く運命の必然に負わせることであつた。クリセイデの恋愛の責任を、その精妙で逡巡する天性の自主性を失わずに、パンダールの働きかけに帰したように、そして恋愛の決定的な成就を占星学的な運命に帰したように、クリセイデの背反については、運命を強調することが、チョーサーに残されていた唯一つの遁れ道だったのである。トロイルスは、別離を前にして、先見と自由意志について長いポイーシアスの瞑想をこらし、予定説に傾く。³⁰クリセイデの背反は、不可避な運命の必然である。トロイルスとクリセイデの恋愛は、トロイの滅亡と一体不可分であり、運命の必至をわかちもっている。たしかに、『トロイルスとクリセイデ』は、すぐれた性格悲劇なのであるが、しかし、それが運命悲劇であり、その意味でポ

イースアスの書であるとする論者もあるということは、運命がそれほど重要な役割を演じているということなのである。

『尼つき僧の物語』では、雄雞が狐にさらわれるという、いわゆる災難が、神の先見どおりに必然的に起るものであるということ、雄雞の信ずるところに従っていかえれば、夢は正夢であるということが、摂理、運命、単純必然、条件必然、自由意志への言及³¹⁾によって示される。

『免罪符売りの物語』においては、運命が暗黙のうち³²⁾にその巨大な手で宇宙を掌握している。三人の極道者が、黄金によって幸福を夢みるが、かえって禍いを手に入れ、死神を殺そうとして、かえって互に殺しあう。そういう運命の皮肉と必然が、道楽者たちのものである。そしてまた、食欲と偽善の「免罪符売り」のものとなるであろうことを、誰が否定しうるであろうか。

VI

『哲学の慰め』の巻を追うての考察は、以上で終ったが、なお述べるべきことは、全篇に遍在して、それを貫く中心原理となっている秩序の世界観である。

神は、万物の始源かつ究極目的として、自らは不動にとどまりながら、万物を循環的に運動させ、公正な限界内に調節する。万物は、始源より出て始源へ帰ろうとする無限の自己循環をして、世界の秩序を形成する。神は、最高善、真の幸福として世界を支配し、万物は、善を求めるといふ自らの法則によって規定されている。すなわち、神は、万物支配の手綱を握り、万物を善の舵で操縦し、愛の紐帯でつなぐのである。「事物の調和のすべてをつなぐもの、それは地と海とを支配し、また天を支配する愛である。愛が手綱をゆるめれば、今互に愛しあっている万物は、絶えざる戦いを戦い、今美しい運動をもって、調和ある確実さで保たれている世界機構を、やっきとなって破壊するであろう。愛は、聖なる盟約をも

って結ばれた国民をつなぎあわせ、純潔な愛人たちの結婚の秘蹟を結びあわせ、誠実な友人たちに法則を規定する⁽³³⁾。神の支配、愛の絆によって、天体の運行、四季の交替、四元の調和、陸海昼夜の別、盟約、結婚、友情などの世界機構が、安定した、統一ある秩序を保つのである。「高さ天の法則」⁽³⁴⁾は驚嘆すべく、それを地上の人間の間にしこうとするのが、すなわちポイーシアスの哲学である。

チヨーサーは、このような愛の絆に、『騎士の物語』の結末で言及し、⁽³⁵⁾『トロイルスとクリセイデ』の中で讃歌を献げている。⁽³⁶⁾そして、もっとも重要なことは、神の摂理のもとで世界が秩序と安定を保つというポイーシアスの世界観が、チヨーサーのものであり、それがいつもチヨーサーの思想の深い根底にあるということである。

Ⅶ

『哲学の慰め』の要旨は、運命のミュータビリティを蔑視し、世俗的な、偽りの幸福を去って、最高善、神という真の幸福に就き、徳に生き、神に祈るということ、そして摂理の公正に信頼し、運命の必然を受容し、秩序の世界観に安心立命するということである。

チヨーサーは、このようなポイーシアスの思想の全局面から、いわば思想のバックボーンを提供されたのである。もちろん、そういう影響のもとにあっても、次の場合、チヨーサーは、あくまでチヨーサーであり、ポイーシアスから明瞭な差異を示す。すなわち、ポイーシアスが、運命の無節操に堪え戦うべしとするストイックな哲学者であるのに対して、チヨーサーは、現世の無常に共感するペイソスの詩人であり、ポイーシアスは、世俗的なものをきびしく排撃するが、チヨーサーは、世俗より超絶的に高いもののあることを凝視しながら、現世的なものすべてを肯定し、寛容し、愛するのである。しかし、摂理の公正、運命の必然、秩序の世界観については、チヨーサーは、ポイーシアスの思想をまったくそのまま受継いで、完全に自分のものにしてている。神が世界をよしと見たもうた原始黙示のヴィジョンが、そのままチヨーサ

ーのものであるゆえんは、まさしくそこにある。チヨースーの世界観あるいは人間観の根底をなすものは、このボーシアスの哲学とカトリック教とであった。

『哲学の慰め』の全思想は、結局、広い意味で秩序の世界観といえるであろう。そしてボーシアスの、したがってチヨースーの秩序の世界観は、中世的であるといつてよいであろう。そのことは、ルネサンスの人間観との対比によって、鮮かに浮び上ってくるであろう。中世は、秩序と權威をもって安定した世界であった。中世の脊髄は、キリスト教神学であり、信仰と理性の調和が、ボーシアスに始まり、スコラ哲学によって、トマス・アクワイナスにおいて完成した。常識と良識、理性と論理、中庸と均衡、おおらかさと健全さが、中世のものであった。それに対して、ルネサンスは、人間を超越する絶対者を見失つたという、人間の自己過信をもって、中世への叛逆である。中世精神が、確立された秩序と權威、常識と中庸の中に見いだした真理を、ルネサンス精神は、チェスタトンのいわゆる「生存の最極端、人間想像の断崖」³⁷⁾に見いださうるものと信ずる。ルネサンスは、集中と熱狂、ダンの表現を借るならば、「水腫病的」(Chydropique)³⁸⁾膨脹を特徴として、中世的なおおらかさと健全さを喪失する。極言するならば、それは、政治における権謀術数の時代、悲劇にある知的自己陶醉の時代、言語の濫用と無意味な喧騒の時代である。そのデカダンスは、凄惨、淫靡にきわまり、狂気の踊り、痴愚のコーラスとなるのであり、シェイクスピアに徴候し、フォード、ウエブスターにおいて頂点に達するものである。誇張的というならば、中世が明鏡止水であったとすれば、ルネサンスは狂瀾怒濤と呼ばれるであろう。

シェイクスピアが代表するルネサンスの世界は、ハムレットの人間礼讃と孤独、憂愁の間に、人間観の振幅をほとんど無限に広げて、人間の可能性について際限を知らぬルネサンス・ヒューマニズムの世界である。チヨースーのは、中世カトリック教とボーシアスの哲学に安住したスタビリティの世界、神の摂理のもとで秩序と安定を保つ世界である。したがって、チヨースーのたぐい稀なヒューマニズムも、あくまで、神を忘れず、人間過信に陥らぬという限界内にあるものであった。それは、もちろん、チヨースーの寛宏の個性から生まれたものであったが、しかし、中世の時代精神を基盤と

して、たしかに中世的なヒューマニズムであったのである。

註

- (1) H. O. Taylor, *The Mediaeval Mind*, Vol. I, Bk. I, Chap. V, "Latin Transmitters of Antique and Patristic Thought," London, 1911.
- (2) E. K. Rand, *Founders of the Middle Ages*, Chap. V, Cambridge, Mass., 1929.
- (3) W. J. Sedgefield (ed.), *King Alfred's Anglo-Saxon Version of Boethius De Consolatione Philosophiae*, Oxford, 1899.
- (4) F. N. Robinson (ed.), *The Poetical Works of Chaucer, Boece* (c. 1380), Cambridge, Mass., 1933.
W. W. Skeat (ed.), *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, Vol. II, *Boethius De Consolatione Philosophiae*, Oxford, 1900.
- (5) C. Pemberton (ed.), *Queen Elizabeth's Englishings, Boethius, De Consolatione Philosophiae*, A. D. 1593, London, 1899.
(EETS, Original Series CXIII)
- (6) *Boethius, The Theological Tractates with an English Translation* by H. F. Stewart and E. K. Rand, *The Consolation of Philosophy with the English Translation of "I. T."* (1609), Revised by H. F. Stewart, London and N. Y., 1918. (The Loeb Classical Library)
- (7) H. R. Patch, *The Tradition of Boethius, A Study of His Importance in Medieval Culture*, N. Y. and Oxford, 1935.
- (8) E. Gibbon, *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, Chap. xxxix, 1838.
- (6) 「哲学の慰め」のテキストは、Robinson 版のチョーサー訳によった。なお、Skeat 版の「The Loeb Classical Library」の中の羅英対訳、及び畠中尚志訳「哲学の慰め」(岩波文庫、昭和十三年)を参照した。以下の註で、B は Boece すなわち Boethius, *De Consolatione Philosophiae* のチョーサー訳をさす。
- (10) B. ii. pr. 2, 55—60.
- (11) *Troilus and Criseyde*, i. 837—54 ; iii. 813—36.
- (12) B. ii. m. 3, 17—25.
- (13) B. ii. pr. 4, 132—33.
- (14) *The Nun's Priest's Tale*, VII 3205 (B 4395).

- (15) *The Knight's Tale*. I (A) 2841.
- (16) *B. ii. pr. 4, 7—10* ; Dante, *Divina Commedia, Inferno*, Canto v, 121—23 ; *Troilus and Criseyde*, iii. 1625—28.
- (17) *The Prologue of the Monk's Tale*. VII 1973—77 (B 3163—67). Cf. Chaucer's glose in *B. ii. pr. 2, 78—80*.
- (18) *B. ii. pr. 2, 74—78*.
- (19) *The Monk's Tale*. VII 2761—64 (B 3951—54) ; VII 1991—96 (B 3181—86).
- (20) *The Knight's Tale*. I (A) 2847—48.
- (21) *Troilus and Criseyde*, v. 1840—41.
- (22) *The Reeve's Prologue*. I (A) 3891—95.
- (23) *The Parson's Tale*. X (D) 1088.
- (24) Cf. *The Wife of Bath's Tale*. III (D) 1109—76.
- (25) *B. iv. pr. 6, 96—101*.
- (26) Cf. W. C. Curry, "Destiny in Chaucer's *Troilus*," *PMLA*, XLV (1930), pp. 129—68.
- (27) *The Knight's Tale*. I (A) 2987—3015 ; 3035—46.
- (28) *B. v. pr. 6, 323—47*.
- (29) W. P. Ker, *The Dark Ages*, Edinburgh and London, 1904, p. 57.
- (30) *Troilus and Criseyde*, iv. 958—1078.
- (31) *The Nun's Priest's Tale*. VII 3234 (B 4424) ; VII 3240—50 (B 4430—40).
- (32) *B. i. m. 2, m. 5, m. 6, pr. 6* ; *ii. m. 8* ; *iii. m. 2, pr. 8, m. 9, pr. 12* ; *iv. m. 5, m. 6*.
- (33) *B. ii. m. 8, 14—27*.
- (34) *B. iv. m. 5, 10*.
- (35) *The Knight's Tale*. I (A) 2987—93.
- (36) *Troilus and Criseyde*, iii. 1744—68.
- (37) G. K. Chesterton, *Chaucer*, London, 1932, p. 238.
- (38) John Donne, *Songs and Sonets*, "A Nocturnall upon S. Lucies Day, Being the Shortest Day."

John Donne, Songs and Sonets, "A Nocturnall upon S. Lucies Day, Being the Shortest Day."